

早川慶・菊水健史・永澤美保

研究の背景と目的

【背景】

- ヒトは生まれつきの素因を持ち、動物に感情的に反応するための迅速な学習プログラムを持っている。これらは、動物に対する好意や嫌悪を生じさせる可能性がある。(Jacobs, 2009)
- 公共の場での介助犬に対するヒトの認識に関する調査において、女性、ペット飼育者、先住民は、公共の場での介助犬の同伴をより受け入れる。(Gibson et al., 2023)

【目的】

イヌの公共の場での、同伴に関して抵抗を持っているヒトの特性を知り、その方々とイヌが共生できる環境をつくるための一助とする。

研究・調査方法

【アンケートの作成】

イヌの社会導入に抵抗のあるヒトの心理特性、要因をアンケート調査により明らかにする。Yahooクラウドソーシングにて集め、解析にはJASPを用いる。

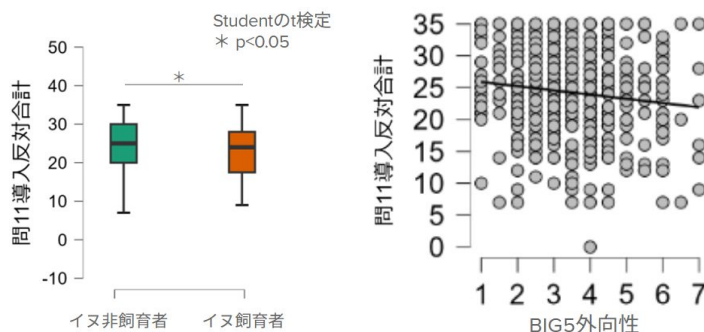
●アンケートの詳細

・性別や年収などの基本情報、ペットの飼育の有無、(ヒトの性格を5つに分類する)BIG5、自尊心、動物観、wellbeing、CEI社会的疎外感、一般的信頼、イヌを社会に導入することに対する質問等を回答者に尋ねた。

結果と考察

結果の一例→

・約500名の回答を得た。



【解析結果】

●導入反対合計に対して、性別、最終学歴、イヌ、ネコ以外のペットの飼育の有無による有意な差はなかった。

●イヌ飼育者、ネコ飼育者は導入反対合計のスコアが有意に低かった。

●BIG5の外向性、開放性と導入反対合計との間に有意な負の相関がみられた。

(導入反対合計＝公共の場所や施設に飼い犬やネコを同伴させることに対して、抵抗のある人ほど高くなる数値。)

・イヌやネコ飼育者、外向的な人や好奇心が高い人はイヌ・ネコの社会導入に対して、比較的に寛容であることが分かった。

これから

「イヌやネコを飼育している場合、BIG5開放性や協調性はなくても受け入れるのかどうか」の解析を追加する。→結果をうけ、イヌ、ネコをよりヒトと近い距離感に社会的に置くことができれば、人々の中でイヌ、ネコに対する寛容さが上がるのではないかと考察した。また、イヌの社会導入を好奇心を刺激するように宣伝したり、イヌを介した社会でのコミュニティを作ったりすることができたら、イヌの社会導入に一步近づくと考察した。